

(別紙 2)

論文審査結果の要旨

氏名 かとう 加藤 あつひこ 昌彦

加藤昌彦氏の「ポー・カレン語文法」は、チベット・ビルマ語族の中で重要な位置を占めるカレン諸語のうちの代表的な言語を、長年の現地調査から得られた豊富なデータに基づいて、音韻から形態・統語に至る文法現象について精密に記述した最初の包括的な文法である。加藤氏は既に、このグループの言語の専門家として内外のチベット・ビルマ語学者の間で高い評価を受けているが、本論文はそのような評価を裏書きするきわめて重要な成果であるといえる。チベット・ビルマ語の中で特異な位置を占め、そのためこの語族の諸言語の分類の鍵と見なされるカレン語の研究は、チベット・ビルマ語全体の研究に大きく貢献するものである。東南アジア特有の、語形変化に乏しい「孤立語」的性格をもつ言語の文法研究に際して、加藤氏は、様々な言語理論に過不足なく目を配りながら、方法としては、本論文冒頭に定義した、もっとも基礎的な言語学的概念を一貫して用いて、言語の構造全体を解明することに成功している。

文法記述の大きな部分を占めるのは、名詞・動詞・従属節などに付加される多数の助詞(particles)で、その意味と機能が数多くの実例に基づいて精密に記述されている。しかし本論文の記述の中でも圧巻は、動詞連続(serial verb construction)と、これに関連する使役を含む諸問題を扱う部分である。動詞連続とは、2つ(またはそれ以上)の動詞が、互いのつながりを示す要素を持たないまま、緊密な意味上のまとまりをなして並置される文法現象で、アフリカや南北アメリカの先住民の諸言語に加えて、とくに南アジアから中国に至る広い地域で見られ、中でも東南アジアはこの現象がもっとも高度に発達している地域と考えられている。加藤氏は、様々な言語学的手続きを用いて、この現象をまず連結型と分離型に分類し、動詞連続と、一見類似して見えるがそれとは区別されるべき言語現象を峻別することによって、動詞連続の論理的な構造を明らかにすることに成功している。本研究が、将来この問題を扱おうとする世界の言語学者が無視できない、重要な成果であることは疑いない。さらにこれと並んで重要な部分は、関係節・補文などの従属節に関わる統語現象を扱った部分で、ここでは特に、前置型と後置型の関係節のような異なったタイプの文型が、どのような基準で使い分けられているかを、きわめて説得力のあるやり方で分析している。

本論文全体として、明晰で、常に論理的なステップを積み重ねて結論に至る記述方法が、説得力を与えている。当然のことながら、未だ将来の調査に待たざるを得ない問題も、みずから数多く指摘しているが、それも本論文全体を通じて見られる、言語事実を最優先に考えるという態度の反映であるといえる。

以上の理由により、本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断する。